SS-2

作成した「災害時対応マニュアル」は東日本大震災で活用できたのか

早川 洋子[1]、大友 昭子[1]、岩間 かおり[1]、長嶺 義秀[2]、川熊 のぶい[3]、藤原　悟[4]

[1]広南病院東北療護センター看護部、[2]広南病院東北療護センター診療部、[3]広南病院看護部、[4]広南病院脳神経外科

【はじめに】我々意識障害患者を看ている病棟では、平成23年3月11日の震災以前から「災害時対応マニュアル」（以下マニュアル）を作成し災害に備えていた。作成したマニュアルが、今回の東日本大震災で活用できたのかを報告する。
【方法】災害発生から翌日までの病棟スタッフの動きを聞き取り調査しマニュアルと比較検討した。
【結果】災害発生時午後2時46分患者は活動時間であり、病棟内では車いす散歩やTV観賞また、人工呼吸器装着しベッドに臥床中の患者、地階ではリハビリを行っていた。第一に自己安全確保となっているが、スタッフそれぞれに行動したのは、患者さんの安全確保と避難経路確保であった。施設内の倒壊などの損傷はなかった。揺れが大きく余震も続いていたため施設外に面会の家族や委託職員などの協力を得て避難。地震後の1~2時間は何の情報もなく、ラジオの放送のみであった。マニュアルに書かれている行動と比較すると、目の前の患者の安全を確保することに精いっぱいで現場で判断しなければならないことが多く、報告やチェックリストの作成などの項目は実施できなかった。
【考察】今回の災害前にマニュアルを作成し提示していたが、実際に全てスタッフがとるべき行動を十分理解していたとは言えない。しかし、どのように行動すればよいのか確認することで実際に動くことが出来たと考える。マニュアルを作成して終了ではなく、マニュアルに沿った行動訓練を日ごろから行う必要があると考える。
【結語】マニュアルの行動項目は活用できていた。さらに、マニュアルに沿った訓練を日頃から積み重ねることが大切である。